

江戸がみえる、歴史がわかる

～古文書入門講座に多くの受講者～

多くの会員から開講が待たれていた「古文書講座」が、本年1月からスタートしました。事業部会と事務局では初めての取り組みとあって、講師陣の選定や講座内容など検討を重ね、このたび入門コース3回シリーズとして実現したものです。

昨年12月発行の『えど友』第4号で、「3回すべてに出席できる方」という条件のもと、定数30名を募集しましたところ、2倍の60名を超える方からご応募をいただきました。

当初は抽選ということになっていましたが、皆さんの「ぜひ参加したい」、という熱意を受け、事務局では急ぎ再検討し、会場を変更して全員が受講できるようにいたしました。

1月11日に行われた第1回の講座(写真)では、野尻泰宏講師の「古文書解読の基礎編」。分かりやすく興味深い講義で、「誰でも慣れれば必ず読め



ようになります」との力強い言葉から始まりました。

2月15日の第2回は、小宮山敏和講師による「近世の武家文書を読む」で、参勤交代に関する文書とその周辺の解説。いずれも好評で、皆さん熱心に聞き入り、メモをとる方の姿も多く見られました。

最終回の第3回は3月15日、西村慎太郎講師の講座が開かれます。入門コースの講師陣は、学習院大学大学院史学専攻(近世)の方々です。

新年度からは、新たな企画で初級・中級コースへと展開の予定です。ご要望、ご意見などをお寄せください。



ハ・イ・ラ・イト

- おかげさまで友の会誕生から1年目を迎えます。新年度もさらにご理解、ご協力をお願いします。
- 会員更新の手続きをお願いします。期日までにお払ください。
- 盛況! 「古文書入門講座」
- 友の会セミナー/講座の要旨
 - ・「式亭三馬の広告双六」
 - ・「江戸の実用書、武鑑を読み解く」
 - ・「都市図の系譜と『江戸一目図』」
- 《えど友プラザ》
 - ・～会報(えど友)が届くまで～
 - ・投稿「江戸のファッション」岡橋園子
 - ・テーマ特集投稿「私と江戸」くその1
- 《事業部会だより》
 - ・3/15 古文書入門 第3回
 - ・3/16、17 ちりめんおさいくもの
 - ・3/23、24 江戸手描友禅
 - ・4/22 特別内覧会 申込受付中
- 会員優待のお知らせ——
 - ・「こどもの世界展」好評開催中!
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽に寄せてください。



会員更新のお知らせ



●手続きはお早めに!

この4月から友の会は第2年度に入ります。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「更新手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

* 更新しませんでした、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

式亭三馬の広告双六

江戸東京博物館学芸員 岩城 紀子



〇〇〇

式亭三馬と薬屋

『浮世風呂』『浮世床』などの作品で知られる戯作者・式亭三馬〔安永5年(1776)–文政5年(1822)〕は生活のためもあり、同時に日本橋本町二丁目で薬屋「式亭正舗」を営んでいました。この店は文化7年(1810)の開業で、翌年売出した化粧水「江戸の水」が人気商品となって、偽物が出回るほどでした。

当時、多くの商店では正月の初売りや開店の際に、得意客にちょっとした配り物をしていましたが、三馬の店でも自身の手による景物本(けいぶつぽん)や双六を、書き下ろしの限定版として得意客に配っていました。

〇〇〇

絵双六の成り立ちと種別

来世へのあこがれを描いた「浄土双六」が日本における絵双六の始まりと考えられますが、町人文化の隆盛を背景に、元禄期以降は来世ではなく、現世的なあこがれを描いた種々の絵双六が流行しました。なかでも旅や名所巡りを描いた「道中双六」が定番となり、江戸時代には主に絵草紙屋で袋に入れて売られていました。

内容は多様ですが、大別すると、次の3つに分類できると思います。

- 場所<旅・空間>の移動を扱う—道中、名所双六。
- 地位の上昇・没落<出世>を扱う—浄土、出世双六。
- モノのランク<人気番付>を扱う—役者、名物、遊郭・遊女双六。

〇〇〇

双六で知る、時代の価値観

歴史資料として見ますと、(1)絵からは

視覚的な情報、言葉書きからは文字情報というように、複合的な情報を同時に得ることができます。さらにそれらを分析することによって、人間の価値観のような「見えない情報」が読み取れます。

次に、(2)出版というメディアを通して不特定多数を対象として制作されたもののなので、(1)の情報は「その時代のある程度一般化された情報」ということができると思います。

こうした点から、双六は単に遊び道具にとどまらず、当時の人々の価値観といったものを知るための「歴史資料」としても有効だと考えられます。

〇〇〇

宣伝上手な、三馬の広告双六

さてそれでは、『御最良御利益初売之迎福神 以御蔭出世双六(ごひいきのりやくはつうりのふくのかみ おんかげをもつてしゅっせすごろく) 全』(歌川国貞画・式亭三馬店刊。東京国立博物館所蔵)を見ていきたいと思います。

三馬が初売りにあたり、得意客に配る景物として作った双六です。類焼した店の新装開店を祝っての初売りであることが、口上に書かれています。

面白そうなところをいくつか紹介しましょう。

振り出しには「ふり出して用くすり婦人萬病飲くまさる」御目印 やねにかんばんあり」として、店の全景が描かれています。双六の「振り出し」と「振り出して用いる」とを掛けているわけです。

その隣のマスには「百日せきの薬一包百文 おっくうを水あめにつけて上げますよ ソリャあアんと ばあうま」とあり、子供に飲ませやすい方法をきちんと織り込んでいます。

左隅のマスには「江戸の水 小箱五十文つめかへ卅二文 コウ」とこの字「江戸の水」はかほのために「妙だよ」それだからにせがたとある」とあり、先ほどお話したように「江戸の水」がブランド品のため偽物がある、ということに注意喚起しています。中身だけ詰めかえる、今日でいうリサイクルをすでにしていた様子も分かります。

また別のマスには、2人の御殿女中の姿が描かれて、「薄化粧大つゝみ百文」としとったわたしどもに「うすけしやうがてうどよいのさ ただ今ハわかいものはあついのをさひますにうすげしやうでくちべにをこくしてかねのくろいのはやりでようございます」と、2人のやりとりが書かれています。

今の若い色男はどうも厚化粧の女が好きではないようで、薄化粧したうえで紅を濃い目に付けるのが流行(はやり)のようだから、当店のおしるい「薄化粧」を使ってください、とさりげなく宣伝しています。

上がりの部分には、新装なった三馬の店の様子が描かれています。右端に門松が描かれていることから、お正月であることが分かります。

店先に年賀の挨拶に来ている男の脇にお付きがいますが、その岡持ちに「西富」と入っています。これは三馬と懇意にしている版元の名で、おそらくこの双六を版行したのでしょう、こっそりと隠し落款的にその名前を入れています。

〇〇〇

双六の魅力を楽しもう

このように、ただ絵として面白いというだけではなく見ごしてしまいがちですが、実は、1枚の双六の中にはいろいろな興味深い情報が潜んでいます。皆さんもこれから双六を見る時に、こうした視点で眺めてみると、また違った楽しみ方ができると思います。

江戸東京博物館企画展『絵双六—遊びのなかのあこがれ—』の図録(1998年)には、多種の双六が載っています。

【記録】広報部会・菅沼和男



江戸の実用書、 武鑑を読み解く

学習院大学史料館助手 藤實久美子

◆武鑑出版の始まり

武鑑は、大名と幕府役人の名前を記した名鑑で、民間の本屋が編集・発行したものです。その出版が始まったのは古く、寛永末ころのものが残っています。それを見ると、諸大名の名前と領地、石高、家紋、官職、諱(いみな)、さらに江戸詰めの家老の名などが書かれていて、江戸で大名を識別するための基本的な要素が備わっています。

三代将軍家光の治世に当たるこの時期に、武鑑の刊行が始まった理由はいくつか考えられます。ひとつにはこのころから京都で本屋がなりわいとして成立してきたことです。

また、幕府が大きな普請を行っていることもポイントです。普請に動員された諸国の大名たちが、互いに石高や格式を理解しあう必要があったことです。

それから参勤交代による江戸への集住があり、大名の名を一覧できるものの出版が社会から要請されました。

こうした出版の担い手は、主に京都と江戸の本屋でした。なかでも新しい趣向・新機軸を打ち出しているのは江戸の本屋です。当時は一般的な文学書とか仏教書の出版は京都が中心で、元禄期に西鶴がでて大坂の出版が興隆します。

上方のこの大きな勢力に江戸が対抗するのは宝暦以降といわれていますが、武鑑に限っては江戸の本屋が早期から主導していました。武鑑には「大名や幕府役人の識別」という実用的な機能が求められて、そうした情報の収集には江戸のほうが上方より有利だったからでしょう。

年が下るごとに掲載される情報は増

えていって、例えば元禄4年(1691)の『本朝武系当鑑』を見ると、系図、替紋、江戸から居城への距離、参勤交代のときのルートなどが増補されています。さらに、江戸藩邸の所在地や行列のときの道具、槍印なども記されています。

◆享保の出版取締令

ところが、享保7年(1722)には出版取締令が出され、活動に重石が乗せられます。幕府は「仲間」の結成を公認し、取り締りの責任を負わせています。公認された仲間は、日本橋通町・中通・南組に属する本屋の3組で、これによって書肆(しよ)に階層性が生まれます。

これ以後の出版は、徳川家や諸家(大名や公家)に関する新しい記事を書いた新版は禁じられ、冊数も4冊(10万石以上の大名編、それ以下の大名編、本丸付きの役人編、西の丸付きの役人編)に固定されます。

このため、板元は抄録版の発行に力を入れ始めます。また、情報も加筆にとどまり、それも10年に一度あればいいほうになりました。

江戸中期を過ぎると、板元も固定されていきました。大手は須原屋茂兵衛と出雲寺で、両者ははげしい競争を繰り返し、ときには町奉行に訴えて争論するケースにまで発展したようです。

◆販売方法と受容

須原屋の天保武鑑を見ますと、値段は4冊物で金1分、銀20匁くらいでした。金1両を10万円とすると2万5千円となり、きわめて高価です。これに月に2、3回の改訂版があり、その都度買っているは大変な出費になります。

そこで江戸に限っては、武鑑の一部を差し替える「つづり代え」のサービ

スとか、銭200文ほどの「略武鑑」も売られました。

売り方は店頭で売るほかに、香具師による振り売りもありました。「大手下馬先の図」には江戸城の大手門を通る行列の様子が描かれていますが、ここは観光名所のひとつで、番屋のところに武鑑売りがいて、駅弁のようなスタイルで売っています。また仲間のルートを通して、全国でも販売されました。

武鑑は実用書であると同時に、土産物としての需要もありました。近江堅田の庄屋による「東武日記」には、江戸に出てきたときに11冊も買っている記録があります。年間の発行部数は5千部ほどといわれますが、これに差し替え版が加わりますから、実数は大変多かったと考えられます。

武鑑が求められたのは、大名や武家の格式が目に見える形で示されていたからです。格式は、路上で出会ったときの複雑な作法と関係していて、相手の識別はきわめて重要でした。

◆武鑑編集の情報源

武鑑に掲載された情報は、すべて非公式な流れの中で集められました。表方(老中から町方まで)のルートでは奥右筆をパイプにしましたが、それ以外に、若年寄支配下の細工方や小納戸方、あるいは先手頭や下座見役を通じて情報を集めました。

先手頭は門番、下座見役は交通整理の役で、行列の特徴と藩主の名前や格式を知っておく必要があり、情報が集まったのです。また、大奥の坊主や医者などのルートもありました。板元はこうしたところに入入りして必要な情報を集めたわけです。

武鑑は全国に発信されて、社会に広く影響を与えました。そこには身分に規定された文化の切れ目がありましたが、同時に本屋が情報を商品化して、身分に規定されない文化の共有もなされたわけで、切れ目をつないでいた機能もあったといえます。

【記録】広報部会・大松騏一



都市図の系譜と「江戸一目図」

江戸東京博物館教授 小澤 弘

都市の景観や心象風景を絵画表現したものを「都市図」としてとらえ、ここでは「都市」は“みやこ”すなわち京、大坂、江戸の三都を対象にします。では、都市図がどのように成り立っていったのでしょうか、系譜図で見ていきましょう。

まず、古くは伝統的な名所(など)や山水を描いたものがあります。中国から伝わり、名所絵として日本で独自に発展を遂げました。次は、宗教的な空間を描いた社寺参詣図や参詣曼荼羅(まんだら)などで、神々を一つの世界観とし建物や山、川が描かれています。

室町期の職人尽絵(づくしえ)や月次(つきなみ)風俗図の源泉には、平安京の年中(ねんじゅう)行事の絵巻があります。月次の遊びや行事に風流が織り成されています。寺社縁起絵巻、源氏物語絵巻などが10世紀以降に描かれました。

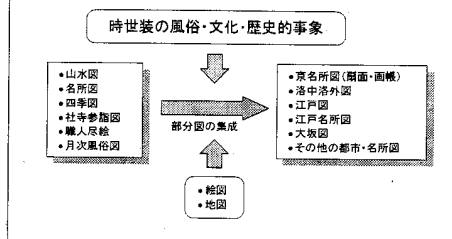
やがて都市の人々の生活や生業、または四季のうつろいなどの要素が描き込まれるようになりました。名所がどこにあるか、位置関係や方位、四季感、陰陽五行説の思想が反映されてきました。そこに文学的、絵画的な世界の中で、京の東山は春、鴨川は夏、高雄は秋、金閣は冬の景——といった概念で描かれました。そこには小さな物語が作られ、絵の対象となって「屏風歌」が生まれました。

平安京が応仁の乱(1467-77)を境に、都も変貌し、新しい都市の風景が作られ、新しい名所ができ、遊びや見世物、能・狂言、歌舞伎、相撲などの催事場(イベント会場)が誕生しました。また、平安祭や祇園会に新興の町中の多くの人々が参加し、町の鉾(ほこ)や山車(だし)がどこを通っていくか、といった情報が組み込まれた絵図が求められました。

そこに、当世風な要素、つまり時世装(時世粧(じせいそう)=今様(いまよう))の姿、たとえば南蛮渡りのタバコ、沖縄からの三線(さん

しん=三味線)などの風俗・文化・事象が取り入れられ、都市景観図が形成されていきました。

日本の都市図成立の系譜



❖都市図の変遷を見る

いくつかの都市図を見ましょう。

都市景観図の源流がどこまで遡れるかは分かっていませんが、まず8世紀の『麻布(まふ)山水図』は正倉院所蔵で、麻の布に墨絵で島や人、トンボなどが描かれています。12世紀後半中国の『清明上河図』には、大きな太鼓橋や人々の集まりが織り込まれています。

『一遍聖絵』では、高貴な人が乗る牛車がフェードイン・フェードアウト(徐々に映像が現れたり、消える処理)するような「すり霞」という技法が用いられ、絵画的手法で場面の切り替えを表現しました。

この技法はのちの「金雲」となり、この技法は室町時代後期に土佐派によって確立されました。金雲は、源氏物語絵巻や屏風絵の場面転換に使われ、源氏雲とも呼ばれました。さらに『洛中洛外図』の有効な手法となって近世後期まで踏襲されていきました。

雪舟の『天橋立図』はランドスコープ(眺望図)として、宗教的空間が想像的な構図で描かれたエポックメイキング(画期的)な作品です。

江戸図屏風などはワイドスコープ(横広の視角)で、隅田川方面から西方角を眺めた横長の景観で描かれました。ほとんどの江戸の地図も西が上部(現在の地図は

北が上)でした。人々の生業や集まりを描くことも洛中洛外図から江戸図に受け継がれました。両国橋や浅草奥山の賑わいの娯楽施設、京の祇園祭は江戸では山王祭などに、京では山、川が地図要素の中心でしたが、江戸では江戸城天守閣や御門、浅草寺といった象徴的な建造物などがランドマーク(陸上の目印)となりました。

これらは第1のパターンの都市図で、地理的關係と不整合の部分金を雲で処理されていました。

❖シームレスな『江戸一目図』

伝統的な第1パターンの都市図に対し、一点透視図法によるシームレスで都市景観を擬似的に表現した俯瞰図の『江戸一目図(ひとめず)』が、鵜形蕙斎紹真(くわがたけいさいつぐさね)によって作られました。紹真は、明和元年(1764)生まれで、浮世絵師北尾重政の門人、画号「北尾政美」、雅号は「蕙斎」。寛政6年(1794)、津山藩松平家の御用絵師に召し抱えとなり、文政7年(1824)没。

この絵図は享和年間に描いた『江戸名所之絵』をもとに、文化6年(1809)津山藩から依頼されたものです。はじめは城内の襖絵(ふすまゑ)でしたが、のちに屏風絵に調製されました。絵画手法は鳥瞰図(ちようかんず)で、さも上空から眺めたような景観です。しかし文字情報はなく、絵も歪曲されていました。

一方、『江戸名所之絵』には地名、建物、名所などの文字情報が265カ所記載されていて、江戸へはじめて来た人にも江戸全体がよく分かる絵図でした。幕末から明治期まで美的な江戸景観の情報として、あるいは、みやげ物としてたくさんの数が流布しました。

16世紀に京で誕生した都市図は、江戸に入って横長の画面で東から西へ(画面に向かって右から左へ)展開していきました。第2の都市図は、金雲技法は使われず「浮絵(うきえ)」の一点透視図法を取り込んだ鳥瞰図『江戸一目図』でした。

明治期以降は、絵画として描かれたそれまでの都市景観図はしだいに姿を消していきました。

講師近著『都市図の系譜と江戸』歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2002/2/1発行
【記録】広報部会・巻瀧 彰



えど友プラザ

友の会会員のページ

会報『えど友』が届くまで ～封入・発送作業を支える総務部会～

会報「えど友」の封入・発送作業は、総務部会員の皆さんによって毎号行われています。多種類の印刷物を手際よく封筒に入れて、テープで封し、あて名シールを張って……と、なかなか大変な作業。まさに皆さんと会をつなぐ重要な役割です。総務部会員を代表して3名の方にお話をうかがいました。

(写真は封入風景、氏名は順不同)

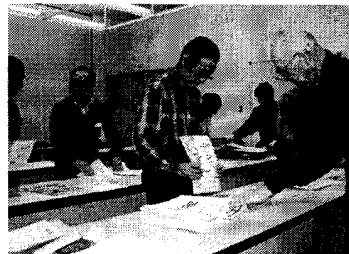
▼遠藤寛さん

発送作業の向う側には、大勢の会員

の皆さんが待っているかと思うと、つい張り切ってしまいます。封入やあて名シール張りを間違えないように、だれもが真剣で、作業が終わるとホッとします。快い疲労感ですね。この作業を通じて、会員間の交流・懇親がはかれるのも、また楽しみのひとつです。

▼児玉知子さん

「えど友」発送のお手伝いは、ふるさとの懐かしさに触れているようで、手応えと喜びがあります。発送数がだんだんと増えているのも、お仲間が増えているこ



とでうれしいですね。これからも頑張って参加していきたいと思っています。

▼井上邦夫さん

友の会活動の一環として、「えど友」の発送作業に携わっていますが、一緒に働く皆さんの手さばきの良さに生気を感じています。私も慣れてきて、最初のころと今では、作業のスピードが違いますよ。今後とも会員の皆さんとともに、友の会の発展を願って元気で参加してまいります。

時代を問わず、男女ともお洒落には興味があることと思います。なかでも一番の関心事は衣装ではないでしょうか。

今の着物は、むかしは実は下着でした。中世までは「大袖」というだぶついた着物を上に着けていて、下着に小袖を着ていたのです。しかし、働く人々にとって大袖は動作が鈍くなり非常に不便です。そこで、次第に動きやすい下着姿が普及していったのです。それは、武士や貴族にも広まりました。

さて、江戸っ子のお洒落ですが、シンプルな色使いとすっきりした着こなしは、武士の都だった江戸から始まりました。京は貴族の都で、煌びやかな錦、大坂は商人の都で、唐三彩から考えだした3色を巧みに取り入れて着こなししていました。一般的に上方のファッションの方が色彩が華やかでした。

身分や男女の差は形の上ではあまりなく、素材や織り方、柄などで差がつけられました。庶民が絹を

禁じられた時代もありましたが、やがて財を蓄えた商人などが絹物を身に着け始め、贅沢になりました。幕府はたびたび禁止令を出して取り締まりましたが、ほんの一時効き目はあってもすぐに華美に戻ったのです。

江戸のファッション

岡橋園子(会員)

江戸では黒を基本とした茶色から鼠色が主体で、当時の染物屋は白から黒まで100種類の鼠色と、48色の茶色を備えていなければ商売は成り立ちませんでした。時代的に流行り廃りもあって、とくに袖や帯の幅などにその傾向が見られます。

こうした流行は、ほとんどが吉原

を源としています。安永(1772～80)以降になりますが、襟抜きの着こなしが、やはり花柳界から始まりました。襟足の美しさを見せるためです。当時流行の髪型に合わせたものでしょう。

豪商は呉服屋を家に呼び、反物を選び、着物を仕立てさせましたが、一般庶民は少ない着物を何度も洗い張りして着るのが当たり前で、祖母から母親、そして娘へと何代にも渡って引き継いで着ていました。

当時は古着屋も多く、今でいうリサイクルという言葉にぴったりでした。この中から工夫して、自分にあつた着物でお洒落を楽しんでいたのです。

いま、着物姿の女性はまれになりましたが、愛用者によると、これほど落ち着くものはないそうで、真っすぐに布が身体を覆っているだけで安心するといいます。江戸のファッションはいつまでも残り続けることでしょう。

テーマ特集

「私と江戸」



江戸・東京400年——江戸への関心がまた、高まってきました。テーマ特集に皆さんから“江戸”にちなんだ興味あるご寄稿を多数いただきました。本号と次号でご紹介します。

引き続き、テーマ特集として江戸をテーマに募集しています。また、続編に明治期、大正期なども予定しています。皆さんの楽しいお便りをお待ちしています。（順不同、敬称略）

江戸っ子気質の継承

松原 良（さいたま市）

私は東京生まれ・東京育ちですが、生まれこそ「芝」と江戸っぽいものの育ちは世田谷で、その後「さいたま」に移り住んだので、普通だと江戸との関わりはそんなにないのです。

しかし、母が芝の生まれ・育ちだったため、知らず知らずのうちにその気質を受け継いでいて、60代の半ばを過ぎた今でも「新しもの好き」「物見高い」「落語好き」「判官びいき」といった気質は健在です。大江戸線が出来たといっちはすぐに乗ったりといった調子で、東京に住んでいる知人や友人より早かったりします。

私の物見高いのにぴったりなのが「川柳庭の会」です。この会は毎月1回、東京を中心に首都圏の公園、庭園をはじめ、博物館、美術館、資料館や話題のスポットなどを歩いて、そこで見聞きしたことをネタに川柳を創って楽しむという会で、その面白さにすっかりはまっています。江戸博もできてすぐのころ、この会で来たのが最初です。

また、落語好きは度を越して、平成7年(1995)には国民文化祭の落語部門でご当地落語の新作台本に応募して全国2位になったり、さらに高じて同9年(1997)には『落語大好き』という260頁ほどの本を出したりしました。この本にも10数枚載せまし

たが、私は水彩画も描いています。古い建物などの風景画が多いのですが、3回ほど開いた個展を見た人からよく「江戸情緒を感じる」とか「江戸趣味だね」など、といわれました。

もしかしたら判官びいきから入ったかもしれない「パ・リーグ好き」は「純パの会」(純粹にパ・リーグを愛する会)との出会いによって、「野球はパに限る」とすっかり虜になっていて、これも江戸っ子気質のなせることかもしれません。

江戸はもともと地方出身者が多く、これは東京になっても同じですが、そこで生まれた江戸っ子気質が、逆に東京を離れて行く人にも受け継がれていってほしいものと願うとともに、私自身その一例でありたいと思っています。

町づくりに見る江戸

齋賀 泉(世田谷区)

東京生まれ東京育ちの私は、都市計画を仕事に選んだこともあって、定年後の今日も江戸の町づくりに興味を持っています。

約400年前に始まった江戸の町づくりは、日本橋を起点に五街道が整備され、これを軸に微地形に細かい気配りをしながら、高台に武家地、低地に町人地や商業地という町割りが行われました。

多摩川から水を引いて水道もでき

ました。鎮守の森や社寺の境内は公園緑地を兼ね、非公開の大名庭園も高密市街地のオープンスペースの役目を果たしたはずで

ました。郊外には、四季折々の行楽地もできました。またソフト面でも、大家を中心とする長屋住まいは一種のコミュニティともいえそうですし、番所、火消し、ゴミや尿尿(しにょう)処理、リサイクルといった暮らしのルールも公私両面から作られていました。

こうした江戸の町は、もちろん封建制というワクの中であるにせよ、一種の理想都市だったのではないのでしょうか。そして、そこに住む江戸の庶民たちはそれなりの心豊かな暮らしをしていたのだと思います。

この江戸を受け継いだ東京は、その後、関東大震災、東京大空襲と壊滅的被害を受け、その都度、明治以来学んだ西欧の都市計画理論を応用した復興計画が実施されました。注目されるのはその2回を通じて、旧江戸市中の町割の骨格がほとんど変わっていないことです。

複雑な土地権利関係、財政難などが抜本的な改造を妨げたこともありましょう。しかし、江戸期に形成された市街の骨格が、道路幅員の拡張や環状線の追加などを除けば、白紙還元して組み直す必要がないほど地形、風土を読み尽くしてできあがっていたからではないでしょうか。

能率のみ追求した都市計画の時代は終わり、21世紀にはすべての人が住みよい町づくりを行う思想と技術が生まれようとしています。そのよ

うな時この江戸の町づくりを検証し、再認識することは大きな意味を持つのではないのでしょうか。

長命寺の桜餅

野坂紘子(江戸川区)

観音様に詣でて大吉、気を良くして待乳山聖天まで足をのばす。江戸の人はどこへ行くのも2本足。女の人には不便だろうと思うのだが浮世絵なんぞを見ても、長い袂(たもと)でゾロゾロと出歩いている。

「待乳山聖天はなぜ大根を供えるの?」と博学な方に尋ねたら、あれは本当は二股の大根だと教えてくれた。芸者さんのご信心も多いそうだ。



ずーと行くと桜橋(写真)。勘九郎さんの小屋がたもとにある。平成中村座。大根は関係なさそうだけど、ちょっと覗いていきたいな。下駄はいて楽しそうにタップを踊るのを観てからは気になる男。パツと華やいだ気分してくれる。義経千本桜。とっても良いそうよ。立見は千円。

橋の真ん中にたたずむと、角田川(隅田川)の川面がキラキラ光っている。白魚がとれた昔は惚ぶべくもないが、江戸川のようにのんびりすぎて

江戸と大坂 門松の違いはなぜ?

板谷武史(文京区)

私は大阪出身で、「大坂文化」と「江戸文化」の違いに、大いに興味を持っております。今回は特集(前号)にちなんで、お正月になくはない「門松」の大坂と江戸との違いについて、ご存じの方がいらしたら教えていただきたいと思います。【図は筆者】

◆疑問点①と②の違い。

江戸の門松は竹を斜めに切って

ないし、新中川のように人工的でもない。荒川のように荒っぽくもなく、川の表情が好ましい。あー、きれいだな、お江戸だな、と思う。

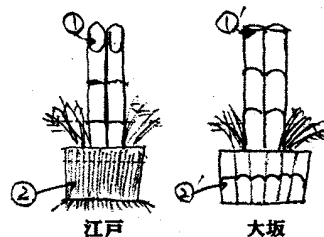
渡れば右手は長命寺の桜餅。左手には言問団子。さあさあ、どうする、どうする。ハムレットほどではないけれど、ちょっと悩むところよね。

さてさて、都鳥には言問わずして、私はごひいきの長命寺へ。最近お餅のアンコが多くなった。量が多くて文句いうのもなんだけど、私は昔の一

あるが、大坂は竹の節に平行に切っているものを使う。その違いはどこから発生したのか?

◆疑問点①と②の違い。

門松を入れる鉢に巻いている材料と巻き方について。江戸では細いワラを鉢に巻きつけ、必ず地面に張り出してあるが、大坂は割竹を地面までの高さにして巻いている。この違いはどこから発生したのか?

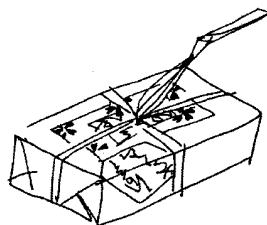


口で食べられる方がよい。

父の相撲みやげで籠いっぱい桜餅。またたく間に3つ4つとたいらげて、香りが部屋中に広がった。今の桜餅だと1つでもたっぷり。中年は昔が恋しい。

桜餅、一番いいのはやはり春。満開の桜の中を歩いてくるのが良い。

桜橋渡って餅を買いにゆく 紘子句になっているかなあ。江戸に恋。ともあれ名代桜餅。江戸博のお土産コーナーでも売ってます。【写真・イラストとも筆者】



~テーマ特集~「私と江戸」 投稿募集を継続!

テーマ特集に多くの投稿をいただきました。好評につき、引き続き募集を継続します。テーマは「私と江戸」。身の回りの江戸文化や江戸情緒、町の話、趣味や関心事、疑問質問など、「あなたと江戸」に関連した事柄を寄稿ください。続編として明治、大正編も予定しています。

○

◆テーマ投稿要領——夏号で特集予定です。

短文(表題も)を、手紙かハガキで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:5月末日。会員番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

広報部会員を募集します。

友の会広報部会の活動に参画し、ご協力いただける方を募集します。会報の企画・取材・編集などを担当します。

ハガキに会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由・特技など、を記載して、事務局までご応募ください。

事業部会 だより

古文書入門講座

古文書講座(入門コース)(最終第3回目)

開催日:3月15日(金) 14:00~16:00

・申し込みは、締め切りました。

・講師:学習院大学大学院史学専攻(近世)、西村慎太郎氏

・会場:江戸東京博物館 1階学習室1・2

ちりめん おさいくもの講座

開催日:3月16日(土)、17(日) 13:30~16:30

・会場:江戸東京博物館・1階学習室

・申し込みは、締め切りました。

江戸手描友禅講座

開催日:3月23日(土)、24日(日) 13:30~16:30

・会場:江戸東京博物館・1階学習室

・申し込みは、締め切りました。

特別内覧会

【企画展】利家とまつ 加賀百万石物語 —前田家と加賀文化—

申込受付中

開催日時 4月22日(月)18:00~19:30
(受付開始 17:00)

会場 江戸東京博物館1階・企画展示室

参加費 500円(当日払い)

申込締切 4月5日(金)必着(会員限定)

会期 4月23日(火)~6月2日(日)
・月曜日休館、ただし、4月29日(月)~5月
6日(月)は休まず開館、5月7日(火)は休館

講座受講 申込方法

▼申込方法:

往復ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、

①会員番号②氏名③〒住所④電話番号

⑤会報、友の会の感想・要望、を明記。

・各講座ごと、会員本人に限り、1人1通。

・「返信用の〒あて先」も必ず記入ください。

▼申込先:130-0015東京都墨田区横綱1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局あて

▼締め切り:各講座案内を参照(必着)

申込み多数の場合は抽選

会員優待のお知らせ

【企画展】こどもの世界

—ひな・きもの・おもちゃ—

好評開催中! 平成14年4月7日(日)まで

会員観覧料: 大人 450円、小中高生 220円

会員の同行者: 大人 720円、小中高生 360円

平成14年度 定時総会は、5月21日

~竹内館長の記念講演も~

新年度(第2年度)の友の会定時総会を5月21日(火)、午後1時30分から江戸東京博物館・1階ホールで開催します。

当日は、総会議事のほか、竹内館長の記念講演が予定されています。ぜひご出席ください。

詳細は追ってご通知・ご連絡します。



次号は5月1日発行の予定です。

江戸東京博物館友の会
会報「えど友」第6号

発行日=平成14年(2002)3月1日

発行=江戸東京博物館友の会事務局

130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1

Tel. 03-3626-9910

編集・制作=友の会広報部会